

# No.105 藤原 吉志子 「ウサギとカメ」

Yoshiko Fujiwara

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年4月15日付 立川市市報記事より

藤原吉志子の作品には、作家のやさしい視線がいつも感じられ、多くのファンがいる。

その作品には物語があるのだが、よく見ているとそのなかに風刺や怖さがあり、時には文明に対する痛烈な批判さえ感じられることがある。

この兎と亀は山への競争の途中だが、その山はアイロン台のようでもあり、もしかしたら何か深い意味が隠されているのかもしれない。

作家は年の半分近くスペインで仕事をしている。日本とスペインの架け橋となるべく熱心に、かつ、楽しく美術を通じた仕事をしているのだが、そこには多くの苦労があるのだろう。スペインの町でその住民と共にいるワークショップはすばらしい作品で、私は感激してしまった。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

ずーっと以前、20年位前、ネパールのカトマンズに行ったことがあります。

街のあちこちに鑄造の動物たちがいるのが印象的でした。

たとえば、舗道の真ん中に、あるいは賑やかな小路の出入り口のその真ん中に、あるいは広場のそこらへんと、脈絡なく、気まぐれに存在していて、定かではありませんが、多くはねずみの形をしていたようでした。

地下世界を統べるヒンズー教の神様のお使いが、地上界の様子をのぞいてみた・・・そんな風にねずみ (のような動物) の上体だけがぴょっこり地面から飛び出しているのです。

ヒンズーの陽気な神様、ガネーシャを背中に乗せているあのねずみはお使いもするのだろうか。子供がよじ登り、大人が腰かけておしゃべりしていたりするものですから、どれもてっぺんがピカピカ光っているのです。

見るたび、何ということなくほのぼのと嬉しくなる天下の公道ののどかなく邪魔もの? > でした。

ファーレ立川での私の課題が丁度このカトマンズ・ねずみなのです。

大きさといい、素材といい、歩道にでんと置いて、車の進入を妨げようというこの条件と状況、非常に気に入っています。